

(資料)

プラトン『ヒッピアス(小)』内容梗概

水* 崎 博 明

目次

- 第一章 (363a-c) ヒッピアスの演説を聞き終へて
- 第二章 (363c-364a) ヒッピアス、問ひに応ずる熱意とその自信の当然を言ふ
- 第三章 (364b-d) ヒッピアスの回答とソクラテスの驚き
- 第四章 (364d-365c) アッキレウスの真実とオデュッセウスの偽りと
- 第五章 (365c-366a) “偽りの人”の有力・狡猾・知・智慧

第六章 (366a-e)

“偽りの人”の核心は望むままに偽り得ること

第七章 (366c-367a)

有能・智慧ありとは真実を語るにも偽るのにもといふことであり、偽りの人の主題も普遍的

第八章 (367a-d)

“偽りの人”の普遍性と同じ人間の真偽両面での有能の点からする帰結

第九章 (367d-368a)

類例の更なる提示

第十章 (368a-369a)

上の考察の一般性

第十一章 (369a-e)

ソクラテスの結論の導きとヒippiアスの不満

第十二章 (369d-370e)

ソクラテスの知者の説を学ぶのだとの立場、そして新たな疑問(アッキレウスもまた偽りの人であるな

ら)

第十三章 (370a-371d)

ヒippiアスの“偽り”の二分と、ソクラテスのアッキレウスより上手の偽りを見る見方

第十四章 (371d-372a)

不本意の偽りと本意のそれとの優劣を、ヒippiアス、後者とする

第十五章 (372a-373c)

幕間・・・ソクラテス、無知と愛智のその人柄を言ひ、自己の見解とその浮動の治癒を依頼する

第十六章 (373c-374e)

過ちの本意・不本意のどちらが優れてゐるかの基礎的考察

第十七章 (374e-375d)

基礎的考察を続行し我々の魂も故意に悪事をなす場合より優れるとする。ヒippiアスの拒絶

第十八章 (375d-376c)

ヒippiアスの拒絶を受けて最終の論証の試み

第一章 (363a-c) ヒッピアスの演説を聞き終へて

1. エウディコス、ソクラテスの沈黙を問ふ。
2. ソクラテス答へて、アッキレスとオデュッセウスとのそのどちらをより優れてゐると考へるかを問ひたいのだ言ふ。

第二章 (363c-364a) ヒッピアス、問ひに応ずる熱意とその自信の当然を言ふ

1. ヒッピアス、ソクラテスの問ひに答へる気持の熱意を示す。
2. ソクラテス、その熱意への称賛においてヒッピアスの自信のほどに肉体上の競技者らが自信を持つ場合の驚嘆を告げるのに、ヒッピアス、自分の自信の当然を言ふ。

第三章 (364b-d) ヒッピアスの回答とソクラテスの驚き

1. ソクラテスの新ためて最初の問ひへの回答を求める。
2. ヒッピアス、ホメーロスはアッキレスを最も優秀（アリストストス）、ネストルを最も賢明（ソポイクタス）、オデュッセウスを最も拔目（ポリトロポイクタス）なしとなしたと答へる。
3. ソクラテス、答へに驚き何度も問ひ直すことへの好意ある対応を求める。応ずるヒッピアス

第四章 (364d-365c) アッキレウスの真実とオデュッセウスの偽りと

1. ソクラテス、オデュッセウスの語り方の理解出来なかったことを打ち明ける。
2. アッキレスとオデュッセウスとの語られ方・・・「諸々の嘆願」の下りにおける、前者のその単純と真実、後者の抜目なさの描き

3. ソクラテスの「抜目無き」とは「偽りの」といふことかとの解釈の問ひとヒッピアスのその肯定の答へ
4. アッキレスとオデュッセウスとが異なる如く、真実の人と偽りの人とは同一人にはあらずとの相互承認

第五章 (365d-366a) 「偽りの人」の有力・狡猾・知・智慧

1. ホメーロスとヒッピアスとは一致してゐる故、「偽りの人」の問題はヒッピアスが答へるべきことの要求
2. 「偽りの人」は力ある者にして抜目なく、それも狡猾と智慧により、その為すことを知る知者である。

第六章 (366a-c) 「偽りの人」の核心は望むままに偽り得ること

1. ソクラテスの語られたことの再確認

イ、*“偽りの人”* 〓それらをこそ偽るそれらに関して有能・有思慮・有知識・智慧者

ロ、*“真実の人と偽りの人との別*

2. 有能・有思慮の含意すること・・・偽る事柄に関して望むならば偽る能力があるのだといふこと

3. その含意―認識の駄目押し

イ、*“偽りの人”* 〓偽るべくも智慧ある者にして有力な者

ロ、従って、偽るべくも無能で無学の者は*“偽りの人”* にはあらず。

ハ、*“望みのまま”* に行為し得る者こそ能力あるもの

ニ、ハの理解の仕方・・・望んではあるが病氣といふ不可抗力に妨げられて出来ないといふ状況にある者を *“望むままにはない”* として理解するやうな仕方ではなく、問題が「ソクラテスの名前を書く」といふことであれば、名前を書くといふことをおおよそ *“望むまま”* であり得るといふ仕方で理解すべきこと

第七章 (366c-367a) 有能・智慧ありとは真実を語るにも偽るのにもといふことであり、偽りの人の主題も普遍的

1. 計算に習熟するヒippiasは望めは最も素早くかつ取り分けて計算の真実を言ひ得る。…ヒippiasは最高に有能かつ智慧ある者だから。

2. *“有能・智慧あり”*の含意・・・また最優秀でもある。… *“真実を語る”* のに最高に有能

3. “偽りを言ふ”能力についてはどうか。

イ、無知な者の偽りは望むままではない。偶然、その意に反して、真実を語ってしまふことがある。

ロ、知者たるヒippiasは望むままに常に偽り得る。

4. 応用問題・・・ “偽りの人”（オデュッセウス）も偽りの主題は普遍的であり数についても偽る。

第八章 (367a-d) “偽りの人”の普遍性と同じ人間の真偽両面での有能の点からする帰結

1. 前章を受けて・・・計算と数についても “偽りの人”がをるといふこと

2. “偽りの人”のあり方・・・（第六章の2より）偽るのに有能

3. ヒippiasは（第七章3のロより）計算を偽るのに有能、かつ（第七章の2より）真実を言ふのに有能

4. 結論・・・同じ人間（≡計算家）が真偽両面で有能であり、計算家以外ではない。

5. 演繹・・・同じ人間としてのそれら両能力であれば、真実の人と偽りの人との間に優劣はない。

6. 他の場合の検討の示唆

第九章 (367d-368a) 類例の更なる提示

1. 幾何学における幾何学者の真偽両面での有能
2. 天文学における天文学者の真偽両面での有能

第十章 (368a-369a) 上の考察の一般性

1. ヒッピアスの能力の多彩への言及
2. 上の考察が不成立で真実の人と偽りの人とが別だと見るかどうか、といふ疑問の突きつけ

第十一章 (369a-c) ソクラテスの結論の導きとヒッピアスの不満

1. 考察全体からの結論へ・・・先のヒッピアスの認識（アッキレウスは真実の人・オデュッセウスは偽りの人）は成り立たず、オデュッセウスが偽りの人であれば彼はまた真実の人でありアッキレウスが真実の人であれば彼はまた偽りの人である。
2. ヒッピアスの結論への不満の表明
イ、ソクラテスの議論の仕方の偏り

ロ、最初の主張には全体的な議論の容易がある。

ハ、オデュッセウスこそアッキレウスに優れるとのソクラテスの反対論の提出の要求

ニ、それによるヒippias説優るかソクラテス説優るかの判定

第十二章 (369d-370e) ソクラテスの知者の説を学ぶのだとの立場、そして新たな疑問 (アッキレウスもまた偽りの人であるならば)

1. ソクラテスの釈明・・・説の優劣を争ふためではなく知者の説の理解のための議論であったとの

2. 新たな疑問の提示・・・ヒippiasがアッキレウスの真実とオデュッセウスの偽りとをホメーロスが語ってゐるのだとした詩句はむしろその逆をこそ示すものではないのか。(引用・・・『イーリアス』IX・II, 357-363, I・II, 169-171)

3. それ故のソクラテスの当惑・・・アッキレウスとオデュッセウスの何れを優るとホメーロスはなしたのだったか。∴ 両者もともに優れ真偽の語りに何れが優れるか判定し難い。

第十三章 (370a-371d) ヒippiasの「偽り」の二分と、ソクラテスのアッキレウスにより上手の偽りを見る見方

1. ヒippiasの「偽り」の二分・・・アッキレウスの企みには拠らず意に反しての、オデュッセウスの企みに拠って自発的なる、

二つの偽り

2. ソクラテスのアッキレウスこそオデュッセウスよりは一枚上手の偽りの人ではないのかとの認識
3. その証拠・・・『イーリアス』IX, II.650-655（アッキレウスの戦ひの自制、ヘクトールの襲来への自制の推測）
4. オデュッセウスへは船出を告げアイアスには逗留を告げる矛盾にも関はず、アッキレウスは企んでもゐないしまたオデュッセウスより策謀と偽りとは上手だと思つてゐないといふのが、これがヒッピアスの見解なのかどうか。

第十四章 (371d-372a) 不本意の偽りと本意のそれとの優劣を、ヒッピアス、後者とす

1. ヒッピアスのアッキレウスとオデュッセウスとの言動解釈
イ、アッキレウスの場合・・・好意による矛盾
ロ、オデュッセウスの場合・・・真偽に関はず常に企みに基づく。
2. その解釈のソクラテスによる解釈・・・後者が前者に優るのか。
3. ヒッピアスの否定
4. ソクラテス、新ためて自分の解釈の理由を言ふ・・・アッキレウスの嘘は不本意、オデュッセウスの嘘は本意であるならば
5. ヒッピアスのソクラテスの解釈の拒否・・・本意の不正と不本意のそれとの相違
イ、前者はより優れはしない。諸々の法も厳しい。

ロ、後者には同情が多い。

第十五章 (372a-373c) 幕間・・・ソクラテス、無知と愛智のその人柄を言ひ自己の見解とその浮動の治癒を依頼する

1. ソクラテス、その賢者たちとの不一致ゆゑの無知と賢者に学ぶ愛知といふ自分の人となりとを言ふ。
2. また当面の問題に関する自らの見解を「意図的な不正・虚偽・欺瞞・過誤は不本意のそれに優る」とするものとする。
3. だが必ずしもこの見解は最終的なものではなく浮動するものであるからこの症状を癒してくれるやうにとも頼む。
4. ヒッピアス、依頼を受けつつもソクラテスの議論の仕方に不満を表明し、ソクラテスが故意ならずと弁解する。

第十六章 (373c-374c) 過ちの本意・不本意のどちらが優れてゐるかの基礎的考察

1. ソクラテスの問題の再確認・・・どちらがより優れてゐるか、本意で過つ者か不本意で過つ者か。
2. 問題考察のための準備的考察

—— 走る場合の本意と不本意 ——

- イ、よき走者⇨よく走る⇨速く走る (悪しき走者⇨悪く走る⇨遅く走る) 速さ⇨よい、遅さ⇨悪い
- ロ、より優れた走者⇨故意に遅く走る走者 (より悪い走者⇨不本意にも遅く走る走者)

ハ、走る || 何かを制作する || 何かを成就する

ニ、悪く走る者 || 悪しく恥づべく競走において走りを成就する

ホ、遅く走る者 || 悪く走る

∴ 1. 善い走者の悪しき恥づべき走り || 故意

2. 悪い走者の悪しき恥づべき走り || 不本意

∴ 不本意に悪しき行為をなす者の方が故意でさうする者より劣る。

—— レスリングの場合の本意と不本意 ——

イ、より優れるレスラー || 不本意に倒れるレスラーよりは本意で倒れるレスラー

ロ、〈倒れる〉の方が〈倒す〉よりも劣りかつ恥づべきこと

∴ 劣りかつ恥づべき行為を故意になす者の方が不本意でなす者より優れる。

—— 一般に肉體運動としての場合 ——

体力に優る者は強い行為と弱い行為、*force* 立派な行為と恥づべき行為との両者が可能であり、従って後者の行為を、体力に

優る者は故意になし体力の劣る者は不本意でなす。

—— 身体つきのよさの観点で ——

より優れた肉體は醜く劣る格好を故意に取り得るが、より劣る肉體は不本意でこそ然り。∴ 不体裁な格好の故意のそれは肉體の優秀性に基つき、不本意のそれはその劣悪さに基づく。

—— 声の場合 ——

故意に調子を外す声と不本意で外す声とは前者こそより優れる。後者はより劣る。所有の歓迎もまた前者であり、故意の跛と不本意の跛についても前者をこそ歓迎する。跛は足の劣悪さにして不恰好である。

—— 視力の場合 ——

臆な視力は眼の劣悪さであるが、人は故意で劣る見方の出来る眼をこそ不本意でさうする眼よりは歓迎する。

∴ 前者を後者よりは優れてゐると信じてゐる。

—— 一般に ——

如何なる感覚器でもあれ不本意に悪しき行為をなすものは劣つたものだから所有には備ひせず、故意にその行為をなすものは優れたものであれば所有に備ひする。

第十七章 (374e-375d) 基礎的考察を続行し、我々の魂も故意に悪事をなす場合より優れるとする。ヒッピアスの拒絶

1. 同様の推論を〈道具〉の場合に当てはめて、e.g. 舵、弓、リュウ琴、笛

2. また〈馬の魂〉の場合、故意に拙い乗馬をすることが出来る馬の魂は所有に備ひし、より優れてゐる。

∴ 右の仕事を故意に劣つた形でなし得るが、劣つた馬の魂では不可避的にそれをなさざるを得ない。

3. 一般化・・・犬の場合、その他すべての動物の場合において

4. 人間の場合について同様の推論

イ、射手の魂

ロ、医術

ハ、弹琴、吹奏、奴隸の魂

5. 我々自身の魂の場合

イ、最善の形で持ちたいと望む。

ロ、故意に悪事をなし過つ場合により優れる。

6. ヒッピアス、この帰結を拒絶する。

第十八章 (375d-376c) ヒッピアスの拒絶を受けて最終の論証の試み

1. ヒッピアスの拒絶を受けて

イ、正義の徳 \parallel 能力 \circ 知識で、正義 \parallel 能力の場合、 \therefore より能力の優れる魂はより正しい。

ロ、正義 \parallel 知識の場合、 \therefore より知識ある魂はより正しい。

ハ、正義 \parallel 能力と知識と、 \therefore 1. より知識あり能力あれば魂はより正しい。

2. より無学で能力が劣れば魂はより不正

プラトン『ヒッピアス(小)』内容梗概(水崎)

一一二七

ニ、より能力ありより智慧ある魂はより優れ、美醜いづれをもより多くなし得る。

ホ、∴ その魂は恥づべき行為を能力と技術とにより故意になす。能力と技術は正義の徳

2. 不正行為は悪事の行為、不正を行為しないのは立派なことの行為
3. ∴ より能力ありより優れた魂は不正行為はこれを故意にこそ行為するが、劣る魂は不本意で行為する。
4. 善い人間 ∥ 善い魂を持つ、悪い人間 ∥ 悪い魂を持つ
5. 不正行為を故意になすのは善い人間のなすこと、不正故意を不本意になすのは悪い人間のなすこと
6. ∴ 故意に過ち不正を行為するのはまさに善い人間において他にはないのである。
7. この結論へのヒピアスの拒絶と議論上必然としつつ心の浮動を意識するソクラテス